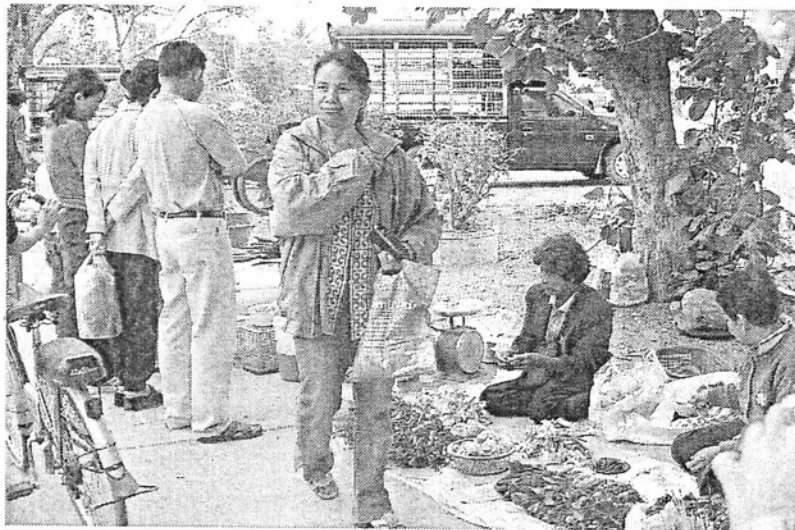


ピープルの地平へ

世界の市場化に抗して

2

文化



タイ 農民自主管理の朝市

大野 和興



【おの・かずおき】ジャーナリスト、日本国際ボランティアセンター(JVC)理事、アジア農民交流センター世話人。1940年、愛媛県生まれ。著書に「農と食の政治経済学」「日本の農業を考える」など。

「水牛はよかった。かわいし、油代がかからない。自分で草を食べ、よく働いてくれた」

「日中の暑い盛りは休ませるから、こちらも昼寝ができた。トラクターだと、休む間もない」

「村の寄り合いは、ああでもない、こつでもない、と夜ふけまで続いた。」

「ここはイサーンと呼ばれるタイ東北部にあるコークスーン村。村人が自主管理する朝市発祥の村だ。その日は周辺の村から朝市見学の農民が訪れ、地元NGOや、支援プロジェクトを立

生産の決定権取り戻す

「いったいなせいなにあくせく忙しくなったのか」「たまるのは借金ばかりだ」「昔のくらしを取りもつ一度復活するものだ、という話に話は落ちついた。」「そうか、朝市はおすわけの経済なのか。」「た女性や子どもが村の広場に集まってくる。すべて自

「おの・かずおき」ジャーナリスト、日本国際ボランティアセンター(JVC)理事、アジア農民交流センター世話人。1940年、愛媛県生まれ。著書に「農と食の政治経済学」「日本の農業を考える」など。

分の家で作ったものだ。やがて村の女性たちが次々とやってきて、立ち話に花を咲かせながら買い物をする。二時間ほど品物はほとんどさげ、余ったものは物々交換される。

「農村で農作物を売って国際相場のしよせで下がる一方、農民はさらに規模拡大競争を強いられ、年収の五倍、十倍もの借金を抱えるようになった。」

「男は大きなことばかり言っていて借金をつくる。私たちが大きいもつけないなんて考えない。自分の作ったものが喜ばれ、また作れるのがうれしい」と村の女性は言う。朝市は、男から女へと農村の主役が交代する契機にもなり、「お金だけではない」という価値観が芽生え始めた。

二〇〇二年からは、村々の朝市委員会が連合して、近くのポン市で地場市場を開いた。その翌年には朝市委員会の連合である市場委員会が独自の有機認証基準をつくり、市場の正式名称も「ポン郡地場産・無農薬直売市場」として、さらに一歩踏み出した。地域の病院や学校との連携を強める活動もしている。村人同士の関係だけでなく、都市と農村を結ぶ新しい運動として動き出したのである。

ポン市に近いヤナーン村では、キャッサバなどの商品作物栽培で荒れた土地を森に戻す「百年の森」づくりと地場市場向けの野菜作りを結びつけ、植林した樹の下に野菜を植え、森づくりの資金にする運動が育っている。学校農園をつくり、それを給食に回したり、販売して子どもたちの学費に充てることも出てきた。

ポン市の公衆衛生局と公立ポン病院はこうした地域の取り組みを、人々の健康、食の安全、環境保全につなげようと動き出した。

地球規模で人々を競わせるグローバル経済の下で、人々は分断され、個人も家族も地域社会も、糸の切れた風(たこ)のように漂っている。農民自身が決定権を持つ生産の仕組みを足元で作りあげてきたタイの村の実践は、確かで長続きする社会への第一歩なのだと思ふ。

(今回は15日に掲載します)

戻したい」。そんな話題がひとしきりあって、五十年輩の女性が話し出した。

「ついでの間まで、何かが余れば近所におすわけした。朝市で売るとなると、

どうするんだ」。初めはそんな声もあったが、朝市の現実を前に吹き飛ばしてしまつた。金が村のなかで回り、顔見知り同士、いいものを食べてもらおうと、農業をやめ、土づくりを精を出す人が増えた。

農産物輸出を国策とするタイで、農村が市場経済にまきこまれる速度は速かつた。輸作物を作り、乱高下する国際相場に振り回されて借金を背負い、出稼ぎに行く人も増えた。例えば砂糖。タイはブラジルに次ぐ世界第二位の輸出国だ。イサーンには製糖工場にぎわうポン市の地場市場(タイ、2005年3月)